

## 全身性出血が見られた豚の事例について

東総食肉衛生検査所 小林 隆司 伊藤 教子 田邊 裕通  
小林 貴子 浦野 圭司 岩瀬 正之

全国のと畜場において、全身性の出血症状を呈する豚はまれに報告されている。なかでもクマリン系薬剤による全身性出血は、殺鼠剤として広く用いられているものの、その報告例は少なく、発症例臓器中の分析について報告例はほとんど無い。今回、千葉県下のと畜場でも物中毒を疑う全身性出血症状を認める豚に遭遇し、その原因を調査した。

### 材料および方法

1. 症 例 豚: 県内各と畜場で全身性出血症状が見られた肉豚4例。
2. 検査部位: 肝臓、腎臓、筋肉。
3. 理化学検査: 殺鼠剤による中毒を疑い、クマリン系3薬剤(ワルファリン、クマテトラリル、プロマジオン)を対象に筋肉、肝臓、腎臓をそれぞれ5g採取し、シリカゲルおよびフロリジルカラムで精製したのち HPLC で分析。

### 結 果

1. 生体所見ではすべての症例に紫斑を認め、うち1例は赤斑もみられチアノーゼを呈していた。
2. 各臓器の所見は、筋肉、心臓、腎臓に4症例すべてで出血が認められた。1症例で腎臓に出血を伴う壊死斑が確認された。
3. HPLC による理化学分析では、4例中1例でピークが得られたが、蛍光スペクトルの測定ではクマリン系薬剤とは確定できなかった。

### 考 察

HPLC による理化学分析では1症例で、腎臓からプロマジオンよりやや遅れたピークが得られた。畜種への聞き取り調査でも、プロマジオンを主成分とする殺鼠剤の使用が確認されたため、殺鼠剤による全身性出血が疑われた。当該症例のクロマトグラフからのプロマジオンの定量値は、ピークをプロマジオンと考えた場合0.48ppmであり、殺鼠剤としての1回の使用量が5~15ppmの本薬剤を誤食した可能性は高いと思われる。しかしながら、スペクトルによる同一性が得られず、プロマジオンによる食中毒とは確定できなかった。当該症例の腎臓を再試験した結果から、プロマジオン後のピークは複数確認されており、対照試験との比較からプロマジオンの代謝産物である可能性も考えられた。プロマジオンは新世代のクマリン系薬剤で、従来の蓄積毒ではなく急性毒による殺鼠剤であり、一度の喫食で症状が発現すると推測され、また、クマテトラリルの200倍の効力を持つとされており、少量の誤食での発症も考えられる。よって近年、養豚家で使用頻度が増しているプロマジオンについて、豚を含めた家畜に対する作用や代謝など不明な点が多いので、その情報収集につとめるとともに、より簡易に検出できる検査方法をさらに検討していきたい。